

【偉大なる神】

11:30 あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順によって憐れみを受けています。

11:31 それと同じように、彼らも、今はあなたがたが受けた憐れみによって不従順になっていますが、

それは、彼ら自身も今憐れみを受けるためなのです。

11:32 神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。

11:33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

11:34 「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。

11:35 だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」

11:36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

私たちは物事を単純に割り切って白か黒か判別したり、善悪の判断を急いだ利する傾向がありますが、実際にはそんなに単純なものばかりではありません。

というのも、「自分の中には良いものは何もなかった」はずなのに回り回って「自分のところに祝福が届くことになった」というようなことが起こることが案外多いからです。

今日のテキストを読むとそのことがよくわかります。

11:32 神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、

それは、すべての人を憐れむためだったのです。

1) 全ての人に憐れみが届けられるため

ユダヤ人の神様への反抗が良いものを生み出すとは人間的には考えられません。それは神様との関係における不信と関係悪化を生み、そして人間関係の不信と悪化へと進むだけのように感じます。

しかし、そのことを通して前から神様を知らず、神に対して敵対していた

異邦人が神の憐れみを受けることになり、そして、それがきっかけになって

不信の塊のような心を持ったユダヤ人が神の憐れみに触れることになるということです。

罪は決して、それ自体、良いものではありません。罪がもたらす報酬は死です。

しかし、死を刈り取るべき人間がイエス様のおかげで神の愛と赦しを受けることができるようになったとすれば、そういう状況の中で生きてきたことの全てが無駄だったとはならないわけです。

もっといえば、福音書の中であれだけイエス様に反抗し、十字架につけると叫んだユダヤ人たちに対して大きな憐れみを示し、赦しと愛を提供してくださる神様は、私たちに対して同じような大きな憐れみを示してくださらないはずがありません。

聖歌の中に「我さえも愛したもう」という賛美がありますが、しみじみとあの曲を心に留めたいと思います。

2) 偉大な神の富と神の知恵

* 神への感嘆。賛美

パウロはただただ神をたたえ、賛美しています。

11:33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

11:34 「いっただれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。

11:35 だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」

ここにパウロの謙遜さがあり、同時に私たち人間がその心の奥深くにしっかりと保つべき姿勢がここに表明されています。

「神を畏れることこそ知恵のはじめ」と箴言は教えていますが

まさに、そのものずばりがここに書かれています。

「神の知恵と知識の深さ」「神の考え、その方法」は人間が作り出すことのできないものであり、そもそも人間には想像することもできないことなのです。

私たちは「神は偉大なお方だ」と言いますが、それをどのくらい日常生活の中で体験しているでしょう。

あるいは日常生活の中でどのくらい意識しているでしょう。

理性優先の世界では「神」は「人間の延長線上」もしくは「対話可能な相手」として人間に向き合える存在として考えられています。

ですから祈る時も個人的な存在として「目の前にいてくださるお方」として意識し祈ります。

その習慣に慣れすぎると、そのお方の個人的な親しい一面ばかりが見えてしまって、その偉大さ「創造主」「生きとし生けるものを保持しておられ、宇宙全体を保持しておられる存在」「私たちの存在そのものを認め、

許して下さり、生かして下さっているお方」

「私たちのいのちを根底から支えておられるお方」

というようなイメージはなかなか感じるできません。

山に登り、大空の下にたち、周囲の山並みを見つめな、朝日や夕日、星や月を見つめながら、これらの世界を保持しておられるお方がおられると感じるとそこには「大きさ」「繊細さ」「雄大さ」「芸術性」を肌で感じます。

小さな花たちだったとしても、その四季折々に咲いてくれる色彩をじっくり見つめるとその見事に圧倒されます。

そして、この世界に対する神の憐れみを感じます。

24 時間飛行機を乗り継いで東京からブラジルまで出かけた時に感じた地球の大きさ、オーストラリアの南の都市アデレードから北の都市ダーウィンまでオンボロバスで1週間かけて走り続け、やっと辿り着いた時の「オーストラリアの圧倒的な広さと荒涼とした砂漠の暑さ」などを通して「この世界に住まわせてもらえていることは」只事ではないと感じました。

ダニエルは捕囚として住んでいたバビロンでこう書きました

「2:19 すると、夜の幻によってその秘密がダニエルに明かされた。ダニエルは天の神をたたえ、
2:20 こう祈った。「神の御名をたたえよ、世々としえに。知恵と力は神のもの。」

2:21 神は時を移し、季節を変え王を退け、王を立て知者に知恵を、識者に知識を与えられる。

2:22 奥義と秘義を現し闇にひそむものを知り光は御もとに宿る。」

そういう底なしの神の愛とその神の偉大さを思いつつパウロは神を讃えています。

11:33 ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。

11:34 「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。だれが主の相談相手であったらうか。

11:35 だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」

11:36 すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

JB フィリップスという人が書いた本に「あなたの神は小さすぎる」というのがありますが、いつの間にか私たちが神様の相談相手になっているような錯覚さえ持つような感覚があります。

地球はこれから、こうすべきだ、ああすべきだ。

社会はこれからこういうふうに進むべきだ。

自分自身さえも自由に変えることができない私たちにそんな大それたことを語る力があるのでしょうか。

神様、どうぞ教えてください。

神様、どうぞ、導いてください

神様、どうぞ、憐んでください

いてくださって感謝します。

という思いを土台に、心に育ってくるさまざまな知恵や知識を

生かして前向きに生きたいものです。

そして、まさに、「我さえも愛したもう」を心にも思っていたいですね。

「我さえも愛したもう」

われは思うわがため 十字架にかかりて
罪のこの身 あがないたもう 主の愛の深さを
われさえも愛したもう われさえも愛したもう
救い主の愛の深さ われさえも愛したもう

われは思うおのれを 釘付けし世のため
父の神に祈りませる 主の愛の深さを
われさえも愛したもう われさえも愛したもう
救い主の愛の深さ われさえも愛したもう

われは思う三度も 五度もそむきし
罪人をもなお受けたもう 主の愛の深さを
われさえも愛したもう われさえも愛したもう
救い主の愛の深さ われさえも愛したもう

ただただ主の大いなる憐れみと赦しの恵みに感謝、感謝。

祝福がありますように。

関根一夫